

退職する友へ

「週末寸言」原稿 20080419

「まことに突然ですが、今月28日の株主総会をもって、本社取締役を退任することになりました。先生には在任中一方ならずお世話になりました。あまりに急な決定です。で、さてこれからどうして行けばいいのか、お先真つ暗です。昨夜も夜中に目が覚めた後、一睡もできないまま夜が明けました。4月からは毎日が日曜日。時間だけはたつぷりあります。近々、旧交を温めに参上致しますので宜しく。取り急ぎ」。

こんなメールが来たのは3月の末、各地から花便りが届き始めた頃だった。今や桜散り新緑の季節だから、さぞやメールの主は鬱勃とした日を送っているに違いない。鬱陶しさを味わっているのは彼だけではない。彼の夫人は、三度三度の食事を彼に用意しなくてはならない。突如「濡れ落ち葉」を抱え込んで、これをどう扱えばいいか、深刻に悩み始めている頃である。何しろ、休日ですら家族と食事を取ったことが無いほど頑張り屋の「社畜人間」。

妻にとっては、「元気で留守がよい」存在だったものが、終日まといつき、行動の自由を奪い、今や鬱陶しいだけと成って立ち現れているのではないか。

これに対する筆者の返事。「三月は別れの月と言いますが、「戦い済んで家庭に復員」というところでしょうか。しかし、本当の勝負はこれから。今までは同僚との苛烈な出世競争でした。だが、これから勝負の相手は自分自身。こいつが一番厄介で最強のライバル。名刺や肩書きという企業社会の「戦闘服」を剥ぎ取られて、職階に無縁なコミュニケーションに帰ってくると、貴兄はただのおじさん。誰も頭を下げてなどくれません。不充実感を訴えて、私の周りには「産業廃棄物」と自虐する企業人OBが沢山やってきます。高学歴で世俗社会の高いところに登った人ほど下山道の距離も長く、地域社会への軟着陸に苦労しています。しかし、地域にとって貴兄の経験と実績は実に貴重。現役時代の名誉あるタイトルは社史に記録してもらおうこと。良として、新たな心がけで地域デビューを果たしましょう。さすれば、必ず豊かな老後が待っていますよ。草々不一」